

次元円板の直積

$$D^\lambda \times D^{m-\lambda}$$

に同相であることを読者自ら確かめてほしい。この直積のことを次元が m で、指数が λ のハンドル、あるいは簡単に m 次元の λ -ハンドル (λ -handle) と呼ぶ。直積のなかに λ 次元円板

$$(3.11) \quad D^\lambda \times \theta = \{ (x_1, \dots, x_\lambda, 0, \dots, 0) \mid x_1^2 + \dots + x_\lambda^2 \leq \varepsilon \}$$

を λ -ハンドルの心棒 (core) といい、それに直交に交わる $(m-\lambda)$ 次元円板

$$(3.12) \quad \theta \times D^{m-\lambda} = \{ (0, \dots, 0, x_{\lambda+1}, \dots, x_m) \mid x_{\lambda+1}^2 + \dots + x_m^2 \leq \delta \}$$

をハンドルの太さを表す $(m-\lambda)$ 次元円板 (co-core) と呼ぶ。双対的な心棒という意味である。心棒 $D^\lambda \times \theta$ と太さを表す円板 $\theta \times D^{m-\lambda}$ の交点は原点 $(0, 0)$ である。これは臨界点 p_i そのものである。

図 3.2 のように、 λ -ハンドル $D^\lambda \times D^{m-\lambda}$ を $M_{c_i-\varepsilon}$ に接着したもの

$$(3.13) \quad M_{c_i-\varepsilon} \cup D^\lambda \times D^{m-\lambda}$$

を考える。パラメタ ε が指数 λ の臨界値 c_i を通過するとき、 M_t の変化は次の定理で記述される。

定理 3.2 $M_{c_i+\varepsilon}$ は $M_{c_i-\varepsilon}$ に λ -ハンドルを接着して得られた多様体に微分同相である。

$$(3.14) \quad M_{c_i+\varepsilon} \cong M_{c_i-\varepsilon} \cup D^\lambda \times D^{m-\lambda}$$

□

$M_{c_i-\varepsilon}$ に λ -ハンドルを接着した空間は、ハンドルの「四隅」のところで境界に折れ曲がりがある。図 3.3 には、ここを滑らかにして (「平滑化」を施して) 得られた C^∞ 級多様体 M' が示されている。

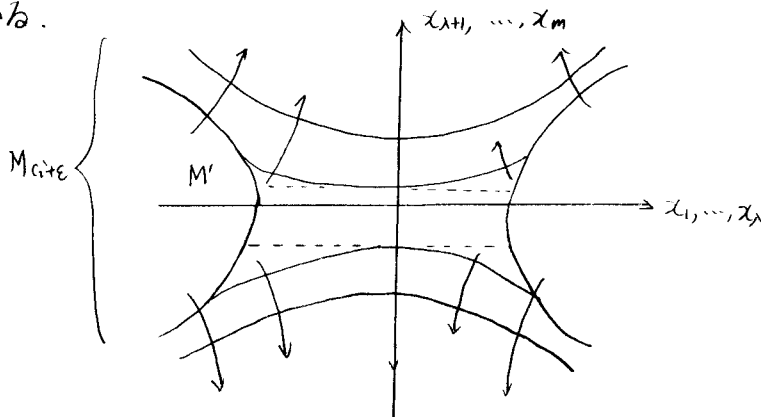


図 3.3 $M_{c_i-\varepsilon}$ に λ -ハンドルをつけたあと平滑化を施した多様体 M'